

「自分」の壁

——高齢者文学人生論

養老孟司 (1937 -)

『「自分」の壁』 (2014) 「新潮新書」

『バカの壁』 (2003) 「新潮新書」

『死の壁』 (2004) 「新潮新書」

『超バカの壁』 (2006) 「新潮新書」

「自分」は矢印に過ぎない

本書を読む者は、「自分」の壁がこわれて、個性を失い、液体か気体のようなものになってしまふことを覚悟しなければならぬ。

「自分」とは何か。バカの壁に頭を打ちつけながら愚かしき一生をふりかえる高齢者に対して、「自分」とは矢印にすぎないと養老孟司はいう。

田舎の山に設置されている案内板は一種の地図だが、その地図に現在位置が示されていないことがある。それでは困る。今、自分はどこにいるかを知りたい。「自分探し」の「自分」とはそんな案内板の矢印である。

脳の中には、「自己の領域」を決めている部位があり、「空間定位の領野」と呼ばれている。私たちは「自分」のことを固体だと思い込んでいるが、「空間低位の領野」が壊れると、それが液体になってしまう。地図の中にある現在位置を示す矢印が消え、自分が地図と一体化する。山と自分の境目が消えてしまう。

この状態がともわかりやすいかたちで表れるのがいわゆる臨死体験だ。花畑が見えたとか、三途の川があったとか、いろいろなパターンがあるが。共通しているのは、とても気持ちよかったという一種の至福の状態になる。

その時点で、周りから見ている限り、その人に意識はない。当然、返事もしない。ただし、かすかな意識があり、ある種の夢を見ている状態だ。



「自分」の壁

高齢者文学人生論

ベッドに寝ている自分を、上から見下ろしていたという幽体離脱現象の報告事例も少なくない。臨死体験者の意識がなぜ至福の状態になるかといえ、自分という矢印が消えて、世界と一体化するからだ。養老孟司は説明する。自分と世界の区別がつかなくなると、自分を脅かすような敵や異物がいなくなる。それなら、「自分」の壁がなくなるのも悪くないという気がする。

明治以降、入ってきた西洋近代自我という考え方は、伝統的な日本の考え方とは相容れず。日本の世間では摩擦を起こしやすい。そのことをよく理解していた一人は夏目漱石だ。

彼は、ロンドンまで留学して、西洋の文化、思想を学び、個人主義というものについて考え抜いた。『私の個人主義』という講演では、「私はこの自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました」と云っている。

しかし、その漱石も晩年の境地は自己本位ではなく、則天去私——「天について私を去る」、つまり、「私なんか無い」という境地を目ざした。

日本の伝統的な文化に基づいて考えを進めていくと、そういう思考をせざるをえない。東と西、西洋は我を立てるほうに、東洋は我を捨てるほうに進んでいった。日本の高齢者は伝統にさかわらず、「我」を消す工夫をしたほうがよいと思う。

自信持て自分探しはムダなこと